レトリックとしてのコロナ禍(1)

――為政者の発言の分析から――

博士課程１年　江　刺　香　奈　　特任研究員　堀　内　多　恵
修士課程２年　若　子　静　保　　博士課程３年　新　井　素　子
修士課程２年　太　齋　　慧　　修士課程１年　福　田　　聖
教授　能　智　正　博

１．問題と目的

新型コロナの広がりによって私たちの生活は大きく変容し，心理面においても様々な影響がみられているようである。メディアは，新型コロナの広がりやその影響と対策について連日報道し続けている。ただ，ここで注意しなければならないのは，そうした社会に流通する言葉は現実を再表象しているだけではなく，むしろ私たちの生きている現実を作り出している面もあるということである。本プロジェクトは，新型コロナ・パンデミックが様々な立場の人にどのように捉えられ，表現され，それがどのような現実を生み出しているかを考察したものである。本論文ではまず，為政者が新型コロナに関してメディアに流す言葉に注目し，次の論文では，一般の人々に新型コロナがどう受け止められているかを検討する。

レトリックが生み出す体験としての病

言葉が人の体験において重要な役割を果たすことは，言語相対仮説をはじめとして人類学や心理学でも以前から注目されてきた。そうした言葉の役割や機能を捉えるための概念として注目されているのが，「レトリック」である。これは伝統的に，言葉を巧みに用いて効果的に表現することやその技法のことを言う。しかし，表現の前に生の現実があってレトリックがそれを飾るというのではなく，レトリックこそが現実と呼ばれているものを作るというのが，言語学や言語哲学におけるほぼ共通了解と言ってもよい。心理学に近い領域においても，Billig (1996) は，ディスコース心理学の１つの手法としてレトリックの分析の重要性を主張している。

レトリックには多様な技法があるが，その中でも比喩は，異なる概念の間にある関係を別のものに例えて，日常的な対象にも新たな意味を加える修辞技法として知られている（佐藤，1992)。比喩にも直喩，換喩，提喩等様々な下位分類があるが，これまで社会科学や人文科学で最もよく扱われてきたのが隠喩，すなわちメタファーであろう。これは「あるものごとの名称を別のものごとをあらわすために流用する表現法」(佐藤，1992, p.101) だが，直喩とは違い，比喩であることを示す「〇〇のような」といった標識が使われないのが特徴である。

メタファーは正体がつかめない病を語るうえでも多用され，その病の体験に影響してきた。この点を詳細に論じたのがSontag（1977 富山訳2012）の『隠喩としての病い』である。そこでは，どちらかと言えばロマンチックなイメージを伴う結核に対し，癌は，悪しきもの，肉体の裏切り，意思の弱さなどと結びついていたという。結果として患者は，病気そのものの苦しさとともに，そうしたイメージに伴う苦しさも体験しなければならなかった。本書を通して，メタファーは大きな力を持つ描写であるがゆえに，時として病気の人々を排除し，烙印を押すことにもつながることが問題提起された。

こうしたSontagの議論は，メタファーを除去した後に病の真の姿があると仮定している点で限界はあるが (柄谷，1989)，私たちが今なお病のレトリックから自由になっているわけではないのは確かであろう。そして2020年以降，私たちは新型コロナという新たな病を前に，新たなメタファーを社会的相互作用のなかで構築しているのではないだろうか。

新型コロナというメタファーの先行研究

新型コロナに関するメタファーを扱った研究は，これまでも海外諸国で報告されてきた。それらを概観すると，為政者の会見やスピーチを対象としたもの，新聞やニュースなどの報道を扱ったものが大半である。

為政者の発言は，一般の人々の意識や行動に影響を与える装置として，いかに機能しているかが検討されてきた（Bates, 2020; Gillis, 2020)。新型コロナについての発言も例外ではない。研究対象は世界各国の為政者で，新型コロナの状況は共通して戦争に例えられることが多い

（Prokhorova et al., 2021; Castro Seixas, 2021; Rajandran, 2020）。そこでは，人々への共感が示されると同時に，医療者が「最前線の戦士」，ロックダウンが「戦略」と表現されるなど，新型コロナという「敵」に向かい合うイメージが，手を替え品を替えて伝えられる（Prokhorova et al., 2021）。結果として人々は，戦時下においてそうであったように，生活に不自由が生じることを受容する（Gillis, 2020）。「戦争メタファー」は，国家における困難な状況のもとで国民に緊急性や危険性を認識させ，団結力を高めて行動変容を促し，緊急措置への遵守を促すといった効果をもつ危機管理方略でもある。

戦争メタファーの具体的な使用については，パンデミックの状況，為政者の統治スタイルや政治体制といった条件によってバリエーションがある。例えば，政局が不安定でクーデターが頻発したボリビアでは，他国よりも頻繁に「長く厳しい戦闘になるが，ボリビア人全員で取り組めば勝てる」といった，今まさに国民がコロナウイルスと戦争しているかのようなメタファーが用いられる（Dada et al., 2021）。それに対して米国では，戦争メタファーを用いる際に第二次世界大戦といった過去の戦争を引き合いに出しがちである（Chapman & Miller, 2021）。感染状況による表現の変化の例としては，英国首相は初めはウイルスを「エイリアン」と述べ，外部からの侵略者のように表現していたが（Prokhorova et al., 2021），自身も含む多くの感染者が報告された頃には「見えない殺人者」と表現し始めた（Dada et al., 2021）。また，多くの国の首脳は，戦う対象を言及する際，特定の国を連想させる表現を一貫して避けているのに対し，前米国大統領のトランプ氏は敵を「中国のウイルス」と名指し，中国との関係に緊張をもたらした（Bates, 2020）。

戦争メタファーの他には，例えばニュージーランド首相はスポーツのメタファーを使っており，政府と国民を「500万人のチーム」と称して「ホイッスルが鳴る前に」などの表現で国民に語りかけている。Kearns（2021）によれば，こうしたスポーツに例えた表現はニュージーランド人の国民性に適したものであり，政府への忠誠やコミットメントを高めることに効果的であるという。

以上，為政者の用いるメタファーについて概観したが，大衆のメタファーの使用についても研究されている。ただそれは，政府の用いるメタファーの影響を大いに受けるものともされている。Rajandran（2020）によれば，戦争メタファーを為政者が繰り返すなかで，メディアも同様のメタファーを発信し，一般の人々も語りやテキストにこの視点を取り込むようになるという。一方で，単に為政者の言葉を取り込むだけでなく，自らにとって一層しっくりくる，代替的なメタファーを検討する動きも見られる（Prokhorova et al., 2021）。

本研究の目的

先行研究からは，新型コロナに関わるメタファーが文脈によって左右され，そこで生み出される現実も変化しうると考えられる。その文脈には，コロナ状況の他，その国・地域の政治状況や文化も関係しているであろう。また，コロナ対策に対してどういう立場にいるかという，語り手のポジションにも影響を受けることが考えられる。その点で，現代の日本の為政者がどのようなレトリックを用い，また，国民がそれをどのように取り入れたり，新たな表現を作り出したりしているのかについて検討していくことには，一定の意義があると考えられる。

そこでまず本稿では，為政者による「公的」な言説として，コロナ禍における小池百合子東京都知事の会見における語りをとりあげる。東京都は我が国においても感染者数が多く，都知事は初期から頻繁にコロナ禍に言及した会見を行っている。そこで使われているメタファーを中心としたレトリックを分析することにより，為政者が言葉により作りだすイメージや影響，さらには為政者の言葉により大衆の行動がどのように方向づけられているのかを考察する。

2．方法

分析対象と時期区分

本研究では，毎週のように行われている東京都知事小池百合子氏の定例会見のうち，新型コロナウイルスに関して言及している部分を分析対象とした。取り上げたのは，2020年３月から翌年６月までの中で抜粋した６か月分（累計32回）の会見である。「東京都公式ホームページ知事の部屋」の「記者会見」に掲載されているテキストをデータとした(東京都, online)。該当箇所の逐語は，少ない日で1743字，多い日で8112字（平均3404字）であった。

時期によってコロナ禍の状況が異なることを考慮し，第１期，第２期，第３期と会見を２か月ずつに分け，データを整理した。各時期の特徴は以下の通りである。

・第１期（2020（令和２）年３月・６月）：WHOよりパンデミック宣言がなされ，国内でも第一波とされる感染拡大とともに，最初の緊急事態宣言が発出された時期。７月からは「Go to」キャンペーン等経済対策も行われた。

・第２期（同年９月・12月）：８月の第二波が収束の兆しを見せた一方で，11月から第三波に向けての感染拡

大がみられるようになった時期。年末には変異ウイルスの感染が国内で初めて確認され，年明けの１月からは２回目の緊急事態宣言がなされた。

・第３期（2021（令和３）年３月・６月）：状況がいったん落ち着いたかに見えたものの４月に第四波が始まり，三度目の緊急事態宣言がなされた時期。医療従事者，高齢者からワクチン接種が始まり，７月からの東京五輪に備えて，感染対策が強化された。

分析方法

フーコー派ディスコース分析を参考に分析，考察した(Willig, 2001 上淵・大家・小松訳2003)。この手法は，言語そのものと社会的，心理的生活を構成する言語の役割を扱い，ある文化の中の言説資源の利用可能性や，文化の中で生きる者とその資源との関連に焦点を当てる。Willig（2001 上淵他訳2003）によれば，この手法は以下の６つの段階からなる。

第１に，テキストにおける言説対象（「新型コロナ」等）がどのような意味として構成されているかを検討する。第２に，同一の言説対象であっても文脈によって参照される言説が異なることに留意しながら，背景にある１つ以上の社会的な言説を特定する。第３に，そのように言説対象を構成することの結果や機能を検討し，そこで実現される言語行為の志向するものを同定する。第４に，言説は主体も構成するため，そうした言説に対する主体のポジションを分析する。第５に，言説の構築により，発話等の行為がどのような実践に結びついているか考察する。第６に，言説が生み出す「主体性」を特徴づける。これは必ずしも自律的なものばかりではなく，社会に対して自発的に従属するようなあり方も含んでいる。

本研究では，上述の視点を参考に分析を行った。まず，第一～第三著者が各時期の会見テキストを分担し，レトリックを抽出して，それが構築するメタファーや，それらの関連性について検討した。次にメタファーの対象として「コロナそれ自体」と，「コロナ禍の状況」に分け，それぞれで生成される自己像と他者像の特徴を検討した。また，そのメタファーに伴う実践に関連して，私たちに及ぼす影響や形象化についても考察した。また，継時的変化を検討するため，上記の分析において現れた特徴について，第１期から第３期を通したストーリーラインを作成した。なお，分析結果については，著者全員で定期的にミーティングを開き，報告並びに意見交換を行って，その妥当性を確認した。

３．結果と考察

新型コロナウイルスをめぐる都知事の会見からは，⑴新型コロナウイルス，⑵それをめぐる状況・対応策，⑶為政者自身の自己像，⑷都民像，という４つのテーマにおいて，特徴的なレトリックが見られた。以下では，それぞれの特徴や継時的変化について述べる。

⑴　新型コロナウイルスとコロナ禍に関連する表現

新型コロナ自体へのレトリックは，戦争を連想させるメタファーおよび，自然災害のメタファーが並行して使われた。都も都民も団結する必要があるというメッセージが暗黙裡に伝えられようとしているように思われる。

未知の敵・脅威の敵　第１期における小池都知事の会見では，新型コロナに「打ち勝たなければなりません」(2020/3/27）という言葉が使われ，ウイルスを「敵」と見立て，戦場を彷彿とさせる表現が多く見られた。この「打ち勝つ」という表現は第２期以降にも続くが，こうした表現の背景には，都民対新型コロナというわかりやすい構図を作り出すことで，都民を一致団結させる方向性を生み出す機能があると考えられた。

また，新型コロナの広がりは，「感染爆発」，「（感染者の）爆発的増加」，「猛威を振るって」(2020/3/23）と描写されている。これは，「敵」の属性を示すレトリックであり，勢いやスピード感をもったものとして印象づける。特に，「爆発」という言葉は，感染者数自体はまだまだ少ない第１期に頻繁にみられ（2020/3/23, 25, 27, 30），さらに，その言葉の前後に「オーバーシュート」(2020/3/23, 25, 30）という聞きなれないカタカナ語が多用された。カタカナ語の使用は小池都知事の特徴とも考えられるが，横文字が使われることで聞き手は，よくわからない危機が迫っているような印象を抱く可能性がある。

進化した敵　その後第３期になると「変異株」に関する言及が多くなり，その拡がりへの警告や対応の重要性・課題についての発言が頻繁に認められた。2021年６月にWHOが変異ウイルスの呼称発表をしたこともあってか，「デルタ株」という固有名詞が幾度も使われた（2020/6/4, 18)。これにより新型コロナにある程度具体的なイメージが加えられ，未知の程度が緩和されたようにも感じられたが，対抗してもより強く進化し続け，倒すことが困難な敵というイメージをもたらしたかもしれない。

自然災害のメタファー　新型コロナは，意志や悪意を持って戦いを挑む人為的存在としての「敵」のみならず，自然災害のように人間が耐え忍び対応すべきものとしても描写される。一般に新型コロナの流行は，「第○波」

といった「波」を入れる表現を使って述べられることが多い。会見では，特に第１期に「第２波」という表現が非常に頻繁に用いられた。これもまた広い意味での比喩だが，津波災害が記憶に新しい日本人にとっては，切迫した脅威を想像しやすくする効果があるかもしれない。

実際，会見では「波」の比喩を拡張したような表現が散見される。例えば，「この大きな第１波のところ波をしっかりと防ぐ」(2020/6/30)，「波の繰り返しを想定しなければならない」(2020/9/10) 等である。また，病床数を「堤防」(2020/6/30)に見立てる表現を用いるなど，感染を「津波」とし，医療体制や感染対策を「堤防」になぞらえている。さらに，感染被害の増加への対応について話す際は，感染を「抑え」る（2020/12/11, 30等)，「食い止める」(2020/3/23, 12/11等)，といった表現が多用され，津波のように，押し寄せてくるものを自分の領分に入り込ませないようにする視覚的イメージが作り出されている。

⑵ コロナ禍の状況を表す表現

都知事の会見には，新型コロナとその影響自体を示すメタファーが使われていたことに加え，パンデミック下にある状況をどのように評価し，どのように対応すべきかが様々な形で含まれていた。それは現状を示す表現ではあるが，都民にどのように行動すべきかを暗黙のうちに示すものともなっていた。

乗り越えるべき難局　当然かもしれないが，いずれの時期も一貫して現状を「難局」であると表現した(2020/3/6, 12/25等)。特に第１期と第２期は，「国難」という言葉が用いられ（2020/3/27, 12/14)，都より大きな国レベルの問題として「危機意識」や「危機感」をもつよう警告する言葉が散見された（2020/3/23, 12/17等)。さらに「岐路」(2020/3/30)，「分水嶺」(12/30)といったメタファーを用いて，未来が現在の都民自身の行動にかかっている可能性を示唆した。そしてその「岐路」の向こう側にある，危機的状況を「乗り切」ったり「乗り越え」た先の将来像を聞き手と共有しようとしたのである(2020/12/17, 12/21等)。

こうした時期には，感染や医療提供体制をめぐる現状を示すために「赤」や「オレンジ」といった色が用いられるようになる。色という記号の使用は，その状況の緊急度合いを視覚的にも訴えることができ，降水量や花粉情報でも馴染みのある状態識別方法である。特に，赤色は，血や炎，非常灯，交通信号における停止などを連想させ，危険や異常を一般的な所記としてもっている。会見においても，例えば「感染状況・医療提供体制ともに赤となりました（2020/12/17)」のように，色のメタファーが効果的に用いられているように思われた。こうした表現は，現在の状況が感覚的に印象づけられ，警戒心を強めるなど気持ちの持ち方や行動への構えを方向づける効果があると考えられる。

油断できない相対的平穏　状況の深刻さを訴える表現は，感染拡大の時期に限ったものではない点も興味深い。感染者の増加が落ち着いたように見えた頃にも，「減少傾向ではありますけれど，それでも高い水準で‥‥」(2021/6/4) など，好ましい状況の説明を逆接で打ち消し，望ましくない状況の描写を続け，現状を「依然として厳しい」(2021/3/18, 19, 6/4) といった否定的な言葉で締めている。第３期に多用されたのが，「リバウンド」という言葉である（2021/3/5, 6/4等)。「健康を守るためのリバウンド防止期間」という言い方からも（2021/3/18)，過度なダイエット同様，以前以上に悪化しうるというイメージをもたせようとしたと考えられる。

このように現状の良好な面は過小評価し，その直後に悪い状況や悪化の予測を強調する表現を用いることで，新型コロナは一時的に抑えられているように見えても，一気に現状を悪化させうる存在だと訴えようとしている。このレトリックは，聞き手を時間的に俯瞰するポジションに立たせるものでもある。楽天主義的な視点を転換させて，都民に気を緩ませないよう現在の行動を方向づけようとしているように思われる。

コロナと共存する新時代　以上のように様々なレトリックを駆使し，現状を難局として特徴づける一方，新型コロナを共存すべき対象としてもイメージづけることがあった。例えば第１期においては，「新しい日常」(2020/6/5, 12, 19等）という言葉が多用された。これは特殊な状況下におけるものとされていた感染対策を，日常化していこうとする表現である。「新しい」という明るい未来を彷彿とさせる語が使われているのが独特である。第２期になると，「新しい日常」に加えて「正しく予防」という語句が対呈示され，感染対策を訴えるキャッチフレーズとして多用された（2020/9/10, 12/4等)。

同じ頃に，「ウィズコロナ」という言葉も使われ始めた（2020/6/12, 19, 26等)。これは「新しい日常」が現在に関する表現であるのに対して，将来の時代も睨んだものである。“～と一緒に”を意味する「ウィズ」はその後に友好的・親和的な人や物が置かれることが多く，新型コロナとうまく共存する状況をイメージさせる効果をもつ。またコロナ対策において，パンデミックの前に戻るという目標が転換されたことも意味している。

これらの表現は，３回目の緊急事態宣言が発令される

頃（第３期）にはあまり見られなくなった。第３期で事業者や個人に何らかの要求をする際は，テレワークや時短営業，早めの帰宅など，具体的な事柄に終始している。理由は定かではないが，長期的な感染対策で疲弊した中で，明るい肯定的表現を使うのはそぐわないと判断されたのかもしれない。あるいは，徹底した感染対策を標榜する東京五輪を前に，コロナとの共生を連想させる発言が抑制されたとも推測できる。

⑶　為政者の自己像の構築

新型コロナに関するレトリックは，コロナとコロナ状況に関する経験を生み出すだけではない。レトリックをより説得的なものにするために，自身の立ち位置を語り手がほのめかすこともあれば，コロナのメタファーを語ることである種の自己像や他者像を生成したりもする。ここでは，都知事を含めた為政者や，一般市民，医療従事者，事業者らがどのような像として描き出され，それがどのような影響を与えるものなのかを検討する。

公僕としての為政者　まず目につくのは，全期間を通し，都民に対して“命令”ではなく“お願い”という形で感染対策を要請した点である。例えば，「ご協力をお願い申し上げます。」といった表現は頻繁であり（2020/3/23, 2021/3/5等），こうした「お願い」姿勢の表現は，都知事および東京都の為政者が，権威的な存在というよりも，献身的で公僕的な存在とするイメージを構築する。ここで言う「公僕」の意味は広く大衆に奉仕する者，public servantという原義に近く，否定的な意味は含まれない。

またそこで含意される「公」は，「国（政府）」とは区別されている。例えば，「都として」「都といたしまして」という表現の多さや（2020/3/19, 6/30等），「都といたしましても，国と連携しながら」(2020/6/30)という対比表現は，語り手が「都」という地方公共団体の長であり，国とは相対的に独立しながら，人々により近い立ち位置にいるという印象を聞き手に与えるだろう。

また，「ノー３密」，「防ごう重症化，守ろう高齢者」，「8時だよ，みんな帰ろう」など，聞こえのよいキャッチフレーズが多用されるのも会見の特徴である。こうしたフレーズは，親しみやすさを感じさせ，都民と近い立ち位置から，仲間に呼びかける民主主義的なリーダー像が形作られることに寄与していると思われる。関連して，都民を代弁するかのようなセリフを入れる表現も特徴的であった。例えば，「宿泊療養施設行けないよ」(2020/9/18)，「コロナ自粛にはもう疲れたよ」(2020/12/21)などがある。こうした日常的な言葉の挿入は，都民に寄り沿い，同じ立場に立って歩もうとする，共感的な為政者の姿を印象づけるものと考えられる。

正当性をもつ為政者　しかし，都民と同じ目線で発するメッセージであっても，都民の行動を促すうえでは何らかの説得力や正当性が必要である。都知事会見でも，都の対策が都民にとって妥当であることを強調・アピールするレトリックが随所に見られた。

まず，新型コロナという「敵」や「災害」に対する抜かりない準備と，的確な対応がほのめかされた。例えば，「（状況を）慎重に見極め」(2020/9/10, 11, 18)，「適時適切（に伝達・対応）」(2020/6/30, 9/10, 18)，「手を緩めることなく先手を打つ」(2020/9/25）という表現である。

また，都民に感染対策を訴える際には，専門家の知見や法律を積極的に引用し，自身の発言に根拠や正当性を与えた。例えば「専門家の先生方（から…と言われて/と相談して…）」(2020/3/23, 9/18, 12/11等)，「…という法律に基づくお願い」(2021/6/4）等である。新型コロナの専門知識が普及する前の第１期・第２期は，そのような言い回しが特に多くあった。

⑷　他者像の構築

ある言葉の意味は単独では存在しえず，他の言葉の意味との関係のなかで生じると言われるが，為政者の自己像も同様であり，その呈示は同時に，関係する他者のイメージも生み出す。ここでは，オーディエンスとしての都民の像と，会見に頻出する医療者像についてまとめる。

声の届け先としての都民　都知事が都民について言及する際は，いくつかの特徴的表現が認められた。前述の「公僕としての為政者」像は，都民全般を奉仕の対象としてイメージさせる機能をもつと思われるが，都民全般をひとまとまりにして言及する表現は他にもある。特に第２期においては，例えば「若い人も，そしてご家族も高齢者の方々も小さいお子さんも…」(2020/12/21）というように，様々な属性をもつ人々がいる前提に立った上で，彼らを一括りにして感染防止を訴えた。また，その団結や協力を示唆する表現も多い。「心を一つに」(2020/12/21, 2021/3/5)，「みんなで…」(2020/9/18, 12/25等)，「力を合わせて」(2020/12/30)，「一丸／一体となって」(2020/3/27, 12/18等）がその例である。

ただ，求める行動によっては，都民を一括りにせずに特定の属性を持つ集団に絞って声を届けようとする傾向も見られた。わかりやすいのが年齢によるカテゴリー化である。例えば第１期には若年層が取り上げられ，「若い方々が無自覚のうちにウイルスを拡散させてしまうということが懸念される」(2020/3/23)，「特に若い方々の皆様方には，（略）…をお願いしたい」(2020/3/27）等，感

染を広げる者としての特徴付けがなされる傾向にあった。それに対し高齢者は，第1期には「若い方々から高齢者や（略）…へと感染が広がって，重症者が増加する」(2020/3/23)，「高齢者などへの感染防止に努めていただきたい」(2020/3/23）等，被害を受けやすい脆弱な集団として印象づけられた。第2期に入るとさらに，「防ごう重症化　守ろう高齢者」というキャッチフレーズのもと，特別配慮すべき存在とされた（2020/9/10,12/14等)。

また，職種による分類と，特定のカテゴリーに属する人々へのメッセージも見られた。例えば第3期になると，事業者・企業を感染対策に協力的がどうかで分ける発言が散見された。「テレワークの実施率が6割程度にとどまっているのは中小企業なんです」(2021/6/4）といった言い方は，事業者・企業を感染対策の実施の程度で分節線を引くような表現である。いずれにしても，都が人々へ求める行動や態度によって，都民を全体化したり部分化したりする戦略がとられていることが窺われた。

医療従事者像の構築　小池都知事の発言に表れる都民のカテゴリーとして特殊なものに，医療従事者がある。これは，都がある種の行動を期待し依頼する対象ではなく，現状の活動を維持することが望まれる対象である。もっとも，第1期においては，「医療」という職域を「都民の皆様が守るべき共通の財産」(2020/3/30）と位置づけるものの，従事者の話はさほど出てこない。本格的に医療従事者への言及がなされるのは，コロナ禍の広がりによって医療サービスの逼迫のリスクが一層声高に叫ばれるようになった第2期以降である。

第2期になると医療従事者に対する言及が急増し，一種の聖化と言ってもよいほどに賞賛的な表現が認められる。「本当に頑張っていただいて」(2020/12/4)，「奮闘いただいて」(2020/12/18)，「大変なご苦労をおかけして」(2020/12/21）等，敬語を伴いながら彼らを称え，感謝の意を表すことが多くなる。しばしば彼らはコロナの戦争メタファーに絡めて「最前線」(2020/9/4, 12/11等）にいるとされ，最も危険な場所で戦う戦士として構築される。戦いは危険を伴い，その中で尽力する彼らは自己犠牲的で，報いられるべき存在というイメージが膨らむ。

第3期になると，都は保健所の任用職員として保健師・看護師を，ワクチン接種業務の「協力」者として医師・看護師を募集した。彼らは「接種の担い手となる有志の医療従事者」(2021/6/4)などと表現され，第2期のような崇拝すべき存在というよりむしろ，ともに戦う同志といった，一般市民により近い存在として描かれることもあった。このように医療従事者にも様々な人が含まれるようになった結果，彼らに対する表現も「都」や一般市民により近い存在へと変化したと考えられる。

4．総合考察

かつてFoucault（1975 田村訳1977）が述べたように，近代的な権力は，以前の「従わなければ殺す」権力ではなく，「生かす」権力の形をとる。即ち，個人が自分のためと考えて行動することが，結果的に社会が期待する方向に自らを律することになるという生-権力が，日本の現代社会でも成り立つとしたら，都知事の発言もその文脈で理解する必要がある。ある意味，その発言は常に聞き手に向けられた遂行的な言語行為であり，現代における権力の行使でもある。そうした権力の影響を維持するためには，常にオーディエンスの特徴やその場での期待を取り込みながら，語りを調整しなければならない。都知事の会見の語りはそうした調整の結果とも言える。

都知事の会見を分析した結果，都知事は状況や対象に合わせ，いくつかの特徴的なレトリックを駆使していることが明らかとなった。新型コロナ自体のメタファーは比較的単純であり，敵や自然災害など，外部からくる禍々しい存在としてのイメージが強い。これは，先行研究で見られた各国首脳の語る戦争メタファー（Castro Seixas, 2021; Gillis, 2020; Rajandran, 2020）と類似するが，為政者が新型コロナに言及する理由を考えれば当然とも言える。一般の人々に向けた為政者の発言は，自らの行政手法を支持してもらい，より効率的な執行がなされるように働きかけるためのものである。「私たち」に対する危機の強調が，市民との一致団結と行動変容を促す戦略として有効であることは，想像できるところだろう。

ただ，そうした戦略の有効性を維持し高めるためには，日本文化や変化する状況を考慮する必要がある。例えば，頻出する戦争メタファーの「戦い」のイメージは日本独特の可能性がある。都知事は直接「戦争」という言葉は用いず，当時の米国大統領のような他国への攻撃を示す表現（Olimat, 2020）も見られなかった。また新型コロナを「敵」と表現するも，「抑える」「食い止める」等，専守防衛的な戦いをイメージするメタファーを多用した。

その背景には，現代の日本人に感じ取られている共通の言説がある。戦争放棄条項を憲法にもち，それが教育され，実質的な戦争が70年以上ない国だからこそ，他国との戦争とは距離をとり，それがリアルなものとしてイメージしにくいのだろう。実際NHKによる世論調査では，大多数の人が戦後から現在までを「戦争のない平和な社会」と肯定的に捉えていた（荒巻・小林, 2015)。「戦

争」を想起させるメタファーは，現代の日本人にとっては時代遅れの，心動かされない表現なのかもしれない。

その一方，戦争メタファーとはいえないようなレトリックに我が国ならではの特徴を見ることもできる。例えば自然災害メタファー（「波」「堤防」等）は，よりリアルな実感をもたらすレトリックではないだろうか。日本は「災害大国」であり，2011年には東日本大震災を体験した。コロナ禍を自然災害になぞらえることで，人々は危機感をより実感しやすいかもしれない。またその一方で，日本人は独特の無常観をもち，自然災害を受け入れる傾向もある。松井（2013）は，日本人は災害を阻止できないものとして受けとめ，「『受容と忍従』による自然との共生」が文化として根付いているとした。為政者の会見が人々にコロナ対策を促すものだとしたら，受容という態度を刺激するメタファーは逆効果になりうる。災害メタファーが，都知事会見に時折みられつつも，主流にならないのはそうした背景があるからかもしれない。

これらのレトリックが一般市民にどのような「主体性」を付与し，どのような行為へ導いたのかを正確に測ることは難しい。ただ，小池都知事の支持率が調査時期を通してそれほど下がらず，激しい反対運動も見られないことから，少なくともそれほど否定的には受け止められていないことが推察される。ただその意味については，現時点では判断を保留せざるをえない。政策の評価が定まるのは，常に１つの時代が終わった後であるからだ。

５．結　語

本稿では，新型コロナとコロナ・パンデミックと呼ばれている状況について，それがどのようなメタファーで語られ，それを巡ってどのようなレトリックが使われているのか，それを可能にしている言説にはどのようなものがあるか，結果的にどのような行為が生み出されているかといった点をディスコース分析の視点から検討した。分析対象のデータは小池都知事の会見の一部であり，使用されたレトリック全ての特徴を網羅しているとは言えないという限界はある。しかし，為政者による言語戦略の在り様を明らかにし，そこでどのような新型コロナのイメージが私たちに与えられているのかの一端を言葉にすることができた。私たちはこのレトリックから生み出された脅威や不安に影響されている面もあるだろう。

しかし，それだけがコロナ禍のすべてではない。一般庶民としての私たちが，与えられたレトリックを超えた別のメタファーを生きられるかどうか，実際どのように生きているのかは，為政者の発言だけではわからない。これは，別稿において探求すべきテーマとなるだろう。

引用文献

荒巻央・小林利行（2015）．世論調査でみる日本人の「戦後」――「戦後70年に関する意識調査」の結果から――放送研究と調査　８月，2-17.

Bates, B. R. (2020). The (In)Appropriateness of the WAR Metaphor in Response to SARS-CoV-2: A Rapid Analysis of Donald J. Trump's Rhetoric. *Frontiers in Communication, 5*, 50.

Billig, M. (1996). *Arguing and Thinking: A Rhetorical Approach to Social Psychology*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Castro Seixas, E. (2021). War Metaphors in Political Communication on Covid-19, *Frontiers in Sociology, 5*, 583680.

Chapman, C. M. and Miller, D. S. (2021). From metaphor to militarized response: the social implications of "we are at war with COVID-19" – crisis, disasters, and pandemics yet to come, *International Journal of Sociology and Social Policy, 40* (9-10), 1107-1124.

Dada, S., Ashworth, H. C., Bewa, M.J., Dhatt, R. (2021). Words matter: political and gender analysis of speeches made by heads of government during the COVID-19 pandemic, *BMJ Global Health, 6*(1), e003910.

Foucault, M. (1975). *Surveiller et punir.* Paris: Gallimard.（フーコー，M.，田村俶（訳）(1977)．監獄の誕生――監視と処罰――　新潮社）

Gillis, M. (2020). Ventilators, missiles, doctors, troops horizontal ellipsis the justification of legislative responses to COVID-19 through military metaphors, *Law and Humanities, 14*(2), 135-159.

柄谷行人（1989）．隠喩としての建築　講談社.

Kearns, R. (2021). Narrative and metaphors in New Zealand's efforts to eliminate COVID-19, *Geographical Research, 59*(3), 324-330.

松井一洋（2013）.「日本人の災害観と防災文化」再考　広島経済大学研究論集, *36*(3), 1-15.

Olimat, S. N. (2020). Words as Powerful Weapons: Dysphemism in Trump's Covid-19 Speeches. *3L, Language, Linguistics, Literature, 26*(3), 17-29.

Prokhorova, O. N., Chekulai, I. V., Agafonova, O. I.,

Pupynina, E.V., Markelova, O. V. (2021). Political Metaphor in COVID-19 Media Coverage, *Laplage Em Revista, 7*, 15-21.

Rajandran, K. (2020). 'A Long Battle Ahead': Malaysian and Singaporean Prime Ministers Employ War Metaphors for COVID-19, *GEMA Online Journal of Language Studies*, *20*(3), 261-267.

佐藤信夫（1992）．レトリック感覚　講談社.

Sontag, S. (1977). *Illness as metaphor; AIDS and its metaphor*. New York : Farrar, Straus and Giroux.（ソンタグ, S. 富山太佳夫（訳）(2012)．隠喩としての病い――エイズとその隠喩――　みすず書房）

東京都．知事の記者会見　令和２年３月・６月・９月・12月・令和３年３月・６月　Retrieved from https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/index.html (2022年2月7日)

Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Buckingham : Open University Press.（ウィリッグ, C. 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至（訳）(2003)．心理学のための質的研究法入門――創造的な探求に向けて――　培風館）

（指導教員　能智正博教授）